
ハリケーン ラブ

中野 かおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリケーン ラブ

【Nコード】

N4572C

【作者名】

中野 かおり

【あらすじ】

男前で乱暴な高校一年の女子、奈央。問題起こしては違う学校へ、また問題を起こしては違う学校への繰り返し。あまりにもひよんなことで男子校に入れられてしまう。そこである少年に恋に落ちてしまう奈央だが…この恋どうなる?!

プロローグ（前書き）

この連載を頑張って書いていくので、読んでくれると光栄です!! よろしく願います!!

ブローグ

… 何だよこの気持ち…

… 何だよあいつ…

あいつの笑顔が頭から離れねえ…

あたしおかしいのか?!

あたしどうしちゃったんだ?!

第1話 こんな毎日！

今…

あたしは学校の廊下を歩いている。

あたしが通るたび皆が後ろを振り返る。

「何あいつ。きも〜！しゃしゃってんの？？女男だあ〜！！」

きやはは〜と仲間と笑っているのは、どっかの社長のお嬢さんとかいう…安田奈々って奴…。

こいつは思い知らせなきゃ分かんねえようだな…

あたしはくるつと反対の方を向き、安田って奴等の方に歩いていき、安田の目の前に立っておもいつきり睨み付けてた。

「…何？」

顔は笑って偉そうにしているが、心底怯えているのが見え見えだ。

「あんた…さっきこいつ等の前で何言ってた？もう一回言ってみるよ。」

「……」

相手は目をそらした。安田のダチ等は、安田の後ろで完全に怯えてる。

周りの奴等は見てもぬフリだ。

「もう一回言えつつてんだろーが！！！！」

安田の胸ぐらをつかんでもおもいつきり怒鳴った。

「すいませ…ん……」

目をそらして謝る安田。

もうめんどくせえ。

「次今みたいな事したら…ぶん殴っからな。」
ぱっと手を離し、あたしはその場を去った。

みんな恐ろしい怪物を見るような目であたしの事を見てくる。

「まったく…悪いのはあっちなんだから、そんな目で見んなっつーの！！」

あたしは飯田奈央。現在高校一年。言葉使い悪いけど、一応女。四人兄弟の末っ子で、上は全員男。母さんはあたしが小さい頃、違う男とくっついてどっかいっちまった…。つまり、あたし以外家族全員男。タフさも元気さも半端ねえ。

あたしは今まで6・7回転校してきてる。全部暴力とか、厳しい学校は暴言とかで退学になっちまってんだ。自分で言うのも何だけど、成績はかなり優秀だぜ？

それなのに！最近の学校は厳しすぎなんだよ！兄さんたちの時は、めったに退学なんかねえつつってたのに！！
まあ、さっき位なら退学になんねーだらうけどさ。

* * * * *

「ただいま」

「あ、お帰り奈央。」

こいつは三男の英章。^{ひであき}高二。あたしは英兄って呼んでる。唯一この家族で、まともなやつだ。（笑）年が近いし、あたしとは結構仲良いんだ。

「英兄いたんだ〜今日の夕飯何〜？」

そう。夕飯係は英兄。英兄の作った飯はまじうめえんだ！！
あたしの100倍な！！

「今日は久しぶりに焼肉だ！！！！」

「お~~~~！！やるな英兄！！！」

こんな会話をしながら英兄と盛り上がっていた。

「ただいま」

「あ！この声は達也兄だ！」

「お帰り」

「ひゅゝ外はあちいゝ！中は天国だ」

この達也兄は我が家の次男。大学二年。この兄ちゃんが乱暴者でひどいんだ。大学に入ってからはおさまったが、高校・中学と暴れて、あたし以上に沢山の人に怪我を負わせてた、強者だ；

「達也兄、最近本当に暴れてねえだろうな？！」

英兄は聞く。

「あつたりめーだ！あ、そういえば、俺、彼女出来たんだぜ！！」

「え？」

あたしと英兄は声をそろえて言った。

「へへっあつちから告ってきてよ！俺に一目惚れだったんだと！今では俺もベタ惚れなんだよ。」

へえ~~~~！あの達也兄が彼女を？！暴れるだけの脳ナシがか？

！…つと！そんなこと本人の前で言ったら殺されちまう…

でも達也兄幸せそうな顔してたなゝ

あたしも彼氏将来出来んのか？…出来るわけねえか。こんな男っぽい女誰が好きに…

「…お…奈央！奈央ったら！」

はっ…！！

「なっ…何だ??」

「一点見つめてほけらーつとしてたぜ…？大丈夫か？そんなに達也兄のこと衝撃的だったか？！まあ確かに衝撃的だけど…」

英兄が心配そうに聞いてきた。

「奈央は彼氏作んねーのか??俺様みてえなかつけえ彼氏！！」

得意そうに達也兄は言った。

「ばーか！あたしみたいな男っぽい女に彼氏なんか出来るわけねー
だろ！！大体達也兄みたいな彼氏ならいない方がマシだばーけ！」
べろべろべろ〜と言つてあたしは達也兄をからかった。

「お前：いつのまにそんな口きくようになったんだ？あ？」
ふざけ切れしてる達也兄。

「きゃ〜〜！！ごめんなさあ〜〜い！ゆるしてお兄さま〜〜！！」
きゃーきゃー言いながら逃げるあたしと追っ掛ける達也兄。

あたしたちの様子を見てケラケラ笑う英兄。

今日も楽しい夕飯が食べそうだ！！

あたしはこの時、これから起こる事件について知る予知もなかった

：

第1話 こんな毎日！（後書き）

今回は、達也・英章・奈央について説明（紹介）しました。出てき次第、お父さん・長男の紹介もします（＾3＾）ノ「あれ？お父さんと長男は？」と思っただ方、これから出てくるのでお楽しみに（＾Q＾）ノ＾（笑）

第2話 衝撃

キンコーンカーンコーン……

あたしは朝っぱらから校長室に呼び出された。

……

「はあ????たいがくう????!」

「はい…退学です…」

「なんで退学なんだよ?!あたしなんもしてねーだろ!!!」

「昨日…安田さんに…何かしませんでしたか??」

「あ?あいつか?あいつになら昨日あたしの愚痴大声で言ってきたから、軽くがんとばしてやった。…それが何だ?」

「安田さんは…ヤスダ堂の社長の娘、いわゆるお嬢様…っていうのは知っているかい?」

「ヤスダ堂って…あの世界No.1文具の王国って呼ばれてるヤスダ堂か?」

「…そのヤスダ堂です。安田さんのお父さんには我が校は沢山助けられていてね。安田さんが君に昨日ひどい目にあわされた、とお父さんに言ったらしくて、今朝お父さまから“飯田奈央を退学にしろ。さもないともうこの学校には一切援助はしない。”と言われてしまったね…彼女のお父さんの援助で、この学校はかなり助けられているんだ。君をこの学校においてあげたい。…だが…すまない…」

…なんで……

「…なんでだよ…」

「…本当にすまない…。あと、彼女のお父さんが君は男子校に行く

べきだと言って…これ…書類…」

あたしはダンツ！と思いつき机を叩いた。

「なんなんだよ！！！！大人の意見で…大人の勝手な考えで決めてんじゃねーよ！！」

書類を校長から奪い、校長室を走って出た。

ダダダダ…

…何なんだよ……

この学校は今までで一番良かった。

これまでの学校は、あたしが乱暴者だと聞いて、教師は全員あたしに対して非難する目で見てきた。

…この学校は違ったんだ。こんなあたしでも、校長から誰から、暖かくむかえてくれた。

あたしもだからそれに応えようと、成績はいつもトップであるよう、問題はあまりおこさないよう、頑張った。

けれど…最終的に裏切られた。

大人は…何でこんなに子どもを裏切るのだろう…

………

「おかあたん、にもついっぱいもって、どこにいくのお？」

「近くのスーパーに行くだけよ。………奈央…いい子でね………」

「…おかあたん…？」

「……」

「まっつてよう！おかあたん！おかあたん！おかあたん！……！」

……

……はあはあはあ……

走りに走ったあたしは、近くの公園のベンチにどかっと座った。

また昔の嫌なこと思い出しまった……

「だめだなあ……あたし……」

こんなあたしだつて、女なんだ。言葉や力は強いからつて……心も強いなんて限んねーんだ……

次……男子校に入れられるんだっけ……？

ガサガサ……

校長からもらった資料を、とりあえず見てみた。

“ 栄然男子高校 ”

「えいねん……つて……結構優秀な学校じゃねーか……」

……

「よっつっ……しゃあああああああ！……！」

もー男子校だろうがどこだろうが、あたしは負けねえ……強くなる……！！

見てろよ!!

第3話 秘密

今日は、栄然高校の入学説明がある。

新しい制服は、上がブレザー・男子校だからもちろん下はズボン。
ていうか…女のあたしが入ってほんと大丈夫なのか？？

「ここか……うわ!!」

でつつっけえ~~~~!!

こんなところに毎日通えんのか……わくわくするな!!

…

「よし!入るか!」

あたしはずんずん学校へ入っていった。

《校長室前到着》

「失礼しまゝすっ!」…シーン……

あれ？

「あの〜」

…;

「わつつ!~!!」

「ギャー!~!!~!!」

突然校長がソファの陰から飛び出してきた。

「ガハハハハハ~~~~!!君が転校生の飯田奈央さんだね?」

…はぁはぁ…

まじびびった…

なっ何なんだこの校長は；

「えっ、あっ、ああ。そうです。」

今のもう疲れたし…

「はっはっは！君ほんとに女かい？胸はないし、目つき悪いし、髪はボサボサだし…うけねらいか？！」

グサグサグサっ！！

っ…畜生！この校長！あたしが女の要素0だって言いたいのか！オナベとでも言いたいのか！

「…べっ…別にそこまで言うことねえだろ…」

ちよつとムスツとしてあたしが言うと

「あっ！…すまんかった…まあ許してくれ！ガハハハ！」

……はあ；

「そーじゃそーじゃ！！わしから君に言いたい事は、簡単に一言。

…君が女子ってことは…私と奈央君の秘密じゃよ？」

へ？？

…ってことは…

「あたしは…男として毎日を過ごす…ってことですよね…？」

「つまりそうじゃ。まあ、君なら元から男前だから、何の問題もないじゃろ！あと…その“あたし”っていうのはやめるんじゃよ。男なら“俺”が基本だ！！分かったか奈央君！」

「はい…。」

「何かあったら、わしのところにいつでも来い！わしは奈央君の味方じゃ。それに…君とは何だかいコンビになれそうじゃしな！」
ガッハッハッハッハといって大笑いする校長。

あはは；

この校長は今までに一番テンション高いな…

“わしは奈央君の味方じゃ。”

この校長なら信じれる気がした。

あ！そうだ。

「あの…校長の名前って何ですか？」

「おっと！そうじゃそうじゃ！私は、サワタリ佐渡嵐。佐渡校長でいいぞ！」

…ほんとこの校長は面白い…。

「ありがと！佐渡校長！あたし…あつ俺！！頑張っから！！」

あたしはニツと笑った。

「そうじゃ！その意気じゃ！明日から頑張ってくれい！あ、この資料に学校の事詳しく色々書いてあるから、ちゃんと読んでくるんだぞ？？あと、新しい教科書とかも入ってるからな！」
とって、ドサツと袋を渡された。

「はい！校長！じゃ！失礼しました〜！！」

ボタン！

あたし…明日からホンモノ『男生活』か……

まあ、しゃべる時は

「俺」で、その他はいつも通りでいいんだよな！

…これからの生活…楽しみだな！

第3話 秘密（後書き）

男として学校生活を送ることになった奈央。そこで…奈央がしゃべる時は「俺」をつかいますが、奈央が心の中で思った時は「あたし」を使わせてもらいます（＾Ｑ＾）／＾そうじゃないと、本当に奈央が男なんだか女なんだか、作者の私までわからなくなってきますからね。（笑）よければ評価のほうも宜しくお願いします（＊＾－＾＊）

第4話 登校初日！

「ただいま」

「あ、おかえり〜！どーだった？！入学説明会。」

いかにも興味津津な英兄。

「めっちゃでかい学校だった…校長はありえねえ位テンション高かったし。（笑）」

嬉しそうに話すあたしを見て、安心したのか、英兄は

「良かったな。今度こそ信じれる学校が見つかったんじゃない？校長がいい人なら教師も当たり多いかもよ？」（笑）」

当たりって…教師はクジかよ…；

「ああ…そうだといいな…。」

あたしはその他にも、校長とどんな話をしたとか、自分男として学校生活を送ることになったとか、色々英兄に話した。

英兄は、やっぱりあたしの心の支えだ。
ずつとな……

* * * * *

次の日、あたしは一段と張り切って学校に向かった。

「うつしや！頑張っぞー！！」

軽く意気込みを入れ、あたしは走りだした。

ドンッ

「痛っ！！！」

誰かとぶつかり、おもいつきりしりもちをついた。

「すまねえ、大丈夫か？！」

そついい、ぶつかつた相手は手を差し伸べてきた。

こいつ……いいやつだな……

「あっさんきゅー！悪いな！」

そついつて立ち上がったあたしに、相手は顔を近付けてきて、

「今度からは気を付けまちようね！おチビちゃん？？」

そついつて相手はにっこり笑つて去つていった。

あたしは呆然と立ち尽くした……

………

おちびちゃん？

しまいには赤ちゃん言葉？

……完つ全にあたしのこと馬鹿にしてたな……

「キイ~~~~つっ！……何だあいつは！！あたしのこと馬鹿にしやがつて！！！」

まわりにいた人全員がこっちを見ている。

……あ……

やべえ……

今“あたし” つつっちゃった……！

しかも大声で……

あたしは軽く咳払いをし、
「おっ！やべやべ！遅刻しちまう。急がなきゃなあ〜！」
と言って全速力で走って玄関に向かい、そのまま職員室へ直行して
いった。

はあはあ…

朝っぱらからよけいな気使わせやがって……

…んじゃ、入るか！

ガラガラガラ…

「失礼しまあ〜す……」

職員室はやはりどの学校もコーヒー臭い。

「えと〜…1年B組担任の前川先生って…」

「わたしよ。」

「わっ！」

目の前に美人でスタイルが良く、いかにも女性らしい前川先生が
つのまにか立っていた。

「あなたが飯田くんね？可愛いじゃない 私は1A担任の前川由佳
里。^{かり}よろしくね！」

そういつて手を差し伸べられた。

「よ…よろしくお願いします…」

あたしと前川先生が話をしているとところを見つけた校長が、嬉しそ
うにこっちに向かってきた。

「おやおやこれは。飯田君と前川先生。飯田君、今日から君はここ
の生徒だっ！頑張るんだぞ〜！！前川先生、よろしく願います
ね。」

『はい。』

校長はスキップしながら校長室へと戻っていった。

「さ、そろそろHRが始まるわ。いきましょ。」

「あ、おう…！」

こうしてあたしたちは教室へと向かった。

* * * * *

教室へ向かっている最中、先生が話した。

「あなたが入る1年A組は、頭が良い子、スポーツが出来る子、イケメンから音楽家まで、選びぬかれた特別な子たちの集まりなの。どの学年でもA組はそういう子たちの集まりなんだけど、今年は特にすごい子ばかりで…。」

……そうだったんだ…

そりやすげえな…

「でも…何で俺みたいなのがA組なんだ？」

「あなた、前の学校で凄く成績優秀だったんでしょ？そりやA組しかないじゃない」

ヤケに嬉しそうな先生。

なんか…あたしすごいところに来ちまったんじゃないか？！

「さ、A組はここよ。」

中からギヤーギヤー騒ぐ声が聞こえてくる。

…ほんとに優秀なのか…?!?

「じゃあちよつとここで待っててね。入ってって言うから、その時に入ってきて！」

そういつて前川先生はウィンクし、教室へ入っていった。

……この先生もテンション高いんだな…

中から声が聞こえる。

「今日は、転校生を紹介します。飯田くんです！入ってきて〜！」

あたしは教室のドアを開けた……

第5話 1年A組（前書き）

更新すぐ遅れてすいません（<—>）……よければ評価お願いしますね（^3^）ノ

第5話 1年A組

ガラガラガラ…

あたしはドアをあけた。

クラスはざわざわしている。

ていうか…

さすがA組…思ったよりイケメン多いな…！

「じゃ、飯田くん 自己紹介お願い！」

先生はこそつと言い、またウインクした。

「…新しく転校してきました。飯田奈央です。どうぞよろしく…。」

「……」

な…なんだよこの重い空気…やりずれえな…；

「……」

「……」

そんな中、先生が突然口を開いた。

「はいはいはい！では飯田君の自己紹介はこれで終了でいいかな

…？？じゃ、席ついてね…！！一番右側の一番後ろの席…」

「あ……………！！！！！！！！！！」

先生がしゃべり終わる前にあたしは突然叫んだ。

…あいつが…

さっきあたしを馬鹿扱いしたあいつが…

あたしをおチビだの何だのっていったあいつが…

一番左側の一番後ろの席にいてはないかア！！！！

あいつ…A組だったのか…

あのやろ…後でぶっ殺してやる！！！！

「飯田…君??」

……はっ!!

皆シーンとすまり、驚いたようなあきれたような顔でこっちを見ている。

「あ…す…すいませんでした…俺の席そこですね? あ、ハイ。分かりました…。」
あたしは、恥ずかしいやら怒りやら何やらで、そそくさと席に向かい座った。

キンコンカンコン…丁度良くチャイムが鳴った。

「それじゃ…皆また授業で会いましょう。」

先生はそう言い、教室をあとにした。

はあ…!!—といいまた教室がざわめきだす…。

そんな中、あたしはチラチラ皆からの視線を何気に浴びていた…;;
うっ…

初日からやらかしちゃったよ…;;

下を向いて、鞆をの中をこそごそやっている、前の奴がふり返って来た。

「飯田君…だよな? 俺、よしみつこいで吉光浩二! 浩二って呼んでいいから! これ

からよろしくな!!—」

彼はそういい、手を差し伸べてきた。

好青年だな… (笑)

「お…おう! よろしく!! 俺は奈央でいいから!—」

……あたしの初めての友達

彼はにっこり微笑んで、

「奈央かあ…なんか女っぽい名前だな!!」

ハハハハ…と言って笑う浩二。

だって一応女だし…;

「お前面白い奴だな!! 初日から良いテンションだぜ!!」

そっくりい浩二は、グツと親指を突き出した。

「いや…浩二もなかなかだと思っぜ?!」

そっくりってあたしも親指を突き出した。

あたしたちはニンマリ笑った。

「あ、そうだ。後で校内説明してやるよ!」

「あ、サンきゅー!!」

「その前に、このクラスの事も…」

このクラスは、かなりのエリートクラスなんだ。」

「あ、そこはさっき先生が教えてくれたよ。」

「そっか。じゃあ話を先に進めるな。すげえ奴等を集めてつくった

らしいこのクラスだけど、その中でもまたずば抜けてすげえ奴等が、

3人いるんだ。」

…すげえな…

「んで、そいつ等って…どいつ等なんだ?」

浩二がしかめていた顔をもっとしかめて、説明し始めた。「一人目

は、一番前のだ真ん中に座ってる奴いるだろ? あいつ。相澤悠也あいざわゆうやっ

ていうんだ。見た感じも、眼鏡で賢そうに見えっから分かりやすい

と思うけど…あいつの成績の良さは…半端ねえ…常にトップは当た

り前。誰もがあいつだけには手が届かねえんだ…。」

「す…すげえな…;」

「二人目は、一番左の列の前から三番目にいる斎藤一馬。(さいと

うかずま)陸上専門のバリバリスポーツマンで、次期オリンピック

選手候補としてあげられているほどだ。ただ やっぱり顔がめち

やいいだろ? だから女癖がひどいらしいぜ…」

「あらま……」

あたし等はちよつと呆れ顔で、斎藤の方を見た。

「んで、最後の奴が、一番左の列の一番後ろのやつで、おさへけんと長部健斗。」

長部…健斗…

つて！あの朝の！！

あたしをバカにしやがった……！！

つて……あいつもなのか？！

「……奈央！？続き…話すぞ??」

「あ、わりい。続けてくれ。」

憎そうに長部を睨んでいたあたしに、浩二は話を中断し、声をかけた。

「あいつの父さんは、有名なピアニストの長部雅夫だ。」

「………うえええ?!あの?!」

長部雅夫つたら…世界的に有名な……

「ちなみにお母さんはフルートの先生やってたはずだ。昔はいろいろでかいコンクールでたりして、色んな賞とってたみたいけどな。」

「

「ひ…ひえ…」

家族揃って…

「あいつはピアノ。いっつも音楽室で弾いてんだけど…めっちゃくちゃ上手なんだ…!!でも…コンクールとかには出ないで…ただ好きで弾いてるみてえだ。」

…そうなんだ…

へえ…

あいつが……

じつと長部を見ていると、長部があたしの視線に気付いたのか、席を立ってこっちに歩みよってきた。

「奈央…長部がこっち来るぜ…?!」

……やべえ……

あわてて視線を逸らしたが、もちろんもう遅かった。

「おい。」

長部はあたし等（ていうか、あたし?!）を見下ろし、いかにも怒っているような様子で話かけてきた。

浩二とあたしはビクツとした。

「何こつち見てんだよ。用でもあんのか？」

冷たい目

「いや…何…」

「だったら…!!!!」

あたしの声は長部の声に掻き消された。

「こつちチラチラ見んじゃねえよ。チビ。」

そういつて彼はその場を去った。

何だあいつ。

その時のあたしは怒りに震えていた。

何様だよ。

「奈央：あいつ口悪いからさ…実際友達も全然いねえし。気にすんな！あ、昼休み校内案内してやるから。」

ニカツと笑う浩二。

「…いろいろありがとな！浩二。」

「なあに。気にすんな！あ、先生来たぜ！」
そういい、浩二は慌てて前を向いた。

あたしは心から浩二のやさしさに感謝した。

それにたいして…

長部の目…

すげえ冷たかった。

腹立つ。

腹立つけど…何故か無性に悲しくもなった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4572c/>

ハリケーン ラブ

2010年12月9日14時33分発行